hito*yume インタビュー

巻頭特集

谷川浩司

（日本将棋連盟会長）

小学校低学年のうちから「天才少年棋士」と評され、中学生プロ棋士、最年少名人として、将棋界のみならず、広く注目を集める谷川浩司さん。数々の名勝負は、将棋ファンの裾野を広げる一翼を担ったといわれる。日本将棋連盟会長に就任した今でも、一人の棋士として対局を続ける谷川さんだが、インタビューの場に現れた谷川さんの風貌は、勝負師とは対極の人物のようであった。あの鋭い「光速の寄せ」は、この人のいったいどこから出てくるのだろうか。

【たにがわ こうじ】

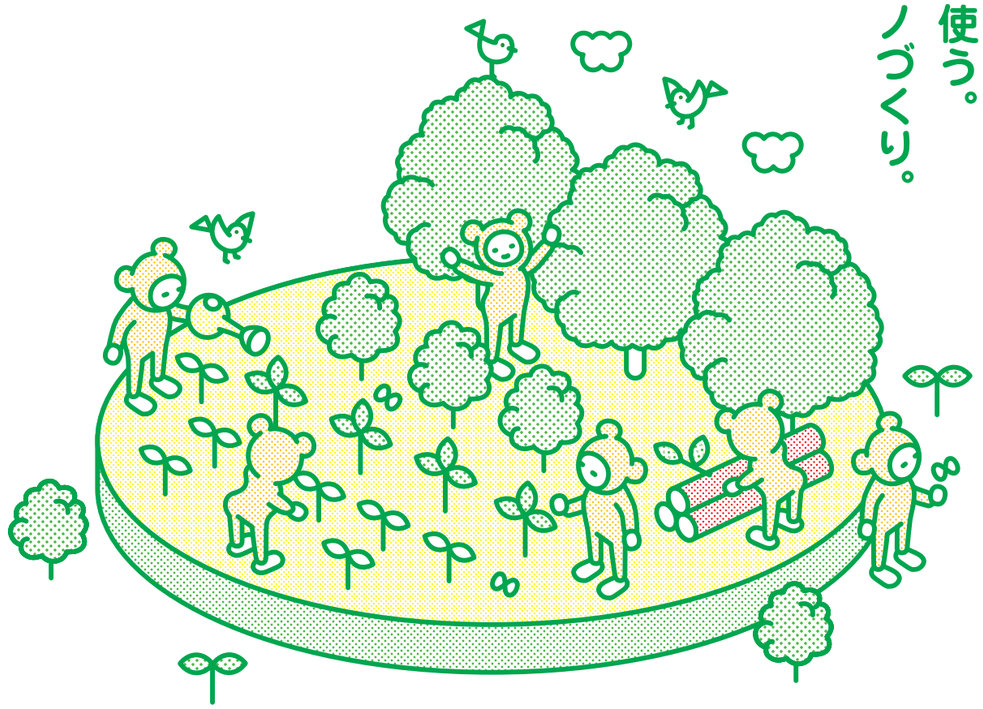
1962年、兵庫県神戸市生まれ。将棋棋士。九段。1976年、中学2年生でプロデビュー。1983年、21歳で名人位に（史上最年少）。その後、竜王、名人、王将などのいわゆる「タイトル」を、のべ27期獲得。名人位に通算5期就いたことで、永世名人の資格をもつ。2012年12月、日本将棋連盟会長に就任。

協力：日本将棋連盟

I'm ニッポン !

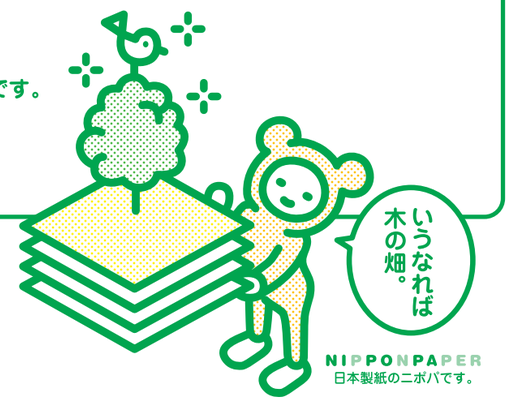
木の可能性 ―日本製紙の植林事業。

自分たちで木を育てる。
育てた分だけ使う。
自給自足のモノづくり。



TREE FARM

「原料を自分たちで育て、生長した分だけ収穫する」という考えが
海外植林事業「Tree Farm」構想。それは、まるで「木の畑」。
「木」を無理なく無駄なく使うために、森づくりは日本製紙の基本です。
持続可能な原料調達を実現するために、
「Tree Farm」を拡大していきます。



日本製紙株式会社

東京都千代田区神田駿河台4-6 御茶ノ水ソラシティ 〒101-0062 TEL.03-6665-1111
www.nipponpapergroup.com

NIPPONPAPER
日本製紙のニポパです。

将棋は、勝っても負けても相手の気持ちを思いやるゲームなんです。

将棋は、勝っても負けても相手の気持ちが伝わってくる

11月のある日曜日の朝。普段は東京モーターショーなどの会場ともなる国際的な見本市会場・東京ビッグサイトに、続々と小学生たちが集まってきた。日本将棋連盟主催の「将棋日本シリーズ テーブルマークこども大会」の東京大会が開かれたのだ。

この日参加した小学生は3202名。「同時に1か所で行われた将棋の対局数ナンバーワン」のギネス世界記録に認定された前年の記録を上回る。太鼓の合図で一斉に指し始める光景は壮観ですらある。

この熱気と喧騒の中、谷川浩司九段が壇上に上がった。2012年12月から務める日本将棋連盟会長としての挨拶をするためだ。

スラリとした長身。柔らかな口調。和服ではなくスーツ姿のせいもあるのか、いわゆる「棋士」のイメージとは少々異なる。ごく普通のもの静かな男性のように見える。

数々のタイトル戦の対局で見せた、息詰まるような威圧感は、この人のいったいどこに隠されているのか。大会が一段落したところでお話を伺った。

テレビで対局の中継を何度か拝見しました。対局中の厳しい表情も忘れられないのですが、それ以上に印象的だったのが、勝敗が決したあとも表情がほとんど変わらないこと。勝ったほうも負けたほうも、淡々と感想戦（対局者同士で、その対局を振り返ること）をされているのが不思議でした。思わずガッツポーズをとりたくなったりしないのですか？

ははは。いやぁ、そういうことはないですね。将棋は勝敗が決する前から、流れとしてだんだんに、これは勝てそうだぞということがわかってきますからね。勝った瞬間に喜びが爆発するということではないんです。

それに、将棋は目の前に相手がいるということも大きいと思います。負けて悔しいという相手の気持ちがわかるんです。ご存知のように将棋は、自分の手を考える一方で、相手が指した手の意味、相手の考えも読まなければなりません。だから、勝っても負けても相手の気持ちがものすごくよくわかるんです。負けた相手の前で一方的に喜ぶという気にはなりませんね。

今日は子ども大会ということでたくさんの小学生が将棋を指しています。相手は初対面のはずです。将棋のすばらしさは、初めて会った相手でも、国籍も年齢も性別も関係なく対戦できるということ。そして、勝っても負けても相手の気持ちを思いやることができるということだと思います。

将棋日本シリーズ テーブルマークこども大会では「やりたいと強く思い続けることができれば、夢は必ずかないます」と子どもたちに語りかけた。

谷川さんは小学校にあがる前から将棋を始められたと伺っています。

私には五つ上の兄がいるんですが、ゲームで遊んでは負けて、悔しくて喧嘩ばかりしていたんです。それがあんまりうるさいので、将棋だったら静かに遊ぶんじゃないかということで、ある日、父が将棋盤を買ってきたというのが、私と将棋との出会いです。私が5歳のときです。

でも、将棋でも私が負けると結局は喧嘩になっていたんですけどね。

父は将棋にはそれほど詳しくなかったので、ルールは百科事典で調べて覚えました。百科事典で学び始めてプロ棋士になったのは私くらいかもしれませんね。そこから将棋にはまっていって、遊びといえばほとんど将棋。兄が学校から帰ってくるまでは相手がいないので一人二役。一人で相手の駒も動かしながらいろいろな手の研究をしていたので、親が見て驚いたそうです。

相手をしてくれる兄が帰るまでは、一人二役で駒を動かし、さまざまな手を研究していた。

「谷川君は、将棋の道に進むことになった」

谷川さんは、中学2年でプロ棋士になられましたが、いつ頃からプロになることを目指したのですか？

うーん、だんだんと自然に目指すようになった感じですね。

ただ、小学3年生のときに学校で「しょうぎ」という詩を書いたんですが、その詩で「奨励会にはまだ入りたくないけど、早く名人になりたい」って書いてるんですね。奨励会に入るということは基本的にプロを目指すということですから、このときはもうプロを意識していたと思います。

3年生の谷川少年が書いた詩が残っていた。

しょうぎ　　3年　谷川浩司

ぼくは九日に、しょうぎ教室に行った。
三回勝ったので、
あと三勝で二だんだ。
ぼくのゆめは、しょうぎ名人だ。
若松先生は
「年内に三だんやな」
おとうさんは
「おにいちゃん追い抜かしたら、
しょうれい会行きやな」
と、いった。
そんなに早く行きたくない。
大山名人でも、
六年生のとき入ったんだ。
学校は休まなあかん。
大阪までひとりで行かなあかん。
でも、早く名人になりたい。

「奨励会」とは日本将棋連盟のプロ棋士養成機関。当時、将棋連盟関西本部は大阪の南端、阿倍野区北畠にあり、谷川さんの住む神戸からは片道2時間近くかかる。しかも奨励会が行われていたのは平日。学校を休まなければならない。谷川少年はそのことを気にして「早すぎる」と思っていたのだろう。

しかし、このときすでに「神戸に将棋の天才少年がいる」という話が将棋界に広まりつつあった。アマチュアの大会に出て、大人たちを負かすことも珍しくなかったからだ。

あの頃は、神戸では子どもの将棋大会は行われていませんでした。だから出場していたのは大人の大会。付き添いできた父が出場者に間違われ、係の人から「将棋を指すのに子どもを連れてきちゃだめじゃないか」と怒られてしまったこともありました。それほど、子どもが大会に出るということが珍しかったんですね。

自分の将棋の力にある程度自信をもつことができたのは、夏休みに東

京で開催された「将棋・よい子日本一決定戦」だったと思います。3年生は本来は低学年の部だったんですが、高学年の部に出場。優勝することができました。神戸という限られた地域だけじゃなく、全国レベルでも通用するんだなと自分でも感じましたし、プロを意識するきっかけになったんじゃないかと思います。

実はこの夏休み、谷川少年にはその未来を暗示させるような出来事があった。神戸で開催された「素人縁台将棋大会」の最終日。今でいうエキシビションマッチとして、谷川少年と、トップ級のプロ棋士・内藤國雄八段（当時）の対局が組まれた。集まった観衆は700人以上。谷川少年はひるむことなく果敢に攻め、引き分け直前に隙を突き、プロ棋士に勝ってしまった。内藤八段は飛車・角を持たない二枚落ちではあったが、「参った、参った。強いよ、あの子は」と舌を巻いたという。

前出の「しょうぎ」の詩を書いたのはこのすぐあとのこと。「将棋」も「二段」も「夢」もまだ漢字で書けない3年生の男の子は、実はすでにプロ棋士への道を歩み始めていたのだ。

「早すぎる」と躊躇していた谷川少年は、結局大山名人より1年早く、5年生のときに奨励会入りすることとなった。

小学校3、4年生の頃には、大人の大会に出場し、すでに注目を集めていた。

小学生のうちからプロの養成機関に入り、中学2年生でプロデビュー。早いうちからそういった道に進むことについて、ご両親や学校の先生から反対されるといったことはありませんでしたか？

実は私の実家は寺なんですが、私の父は私や兄に対して、寺を継いでほしいと言ったことは一度もありません。好きなことに取り組むことが幸せだ……という考えでした。

父は大正生まれで戦争も経験していましたし、体もあまり丈夫ではなかったので、息子にはやりたいことをやらせてやろうということだったのではないでしょうか。

学校の先生から反対されたり、学校を休むことについて何か言われたりすることもなかったですね。中学、高校は私立で、同級生に後にプロ野球の近鉄バファローズで活躍する石本貴昭君もいましたから、勉強以外のことで自分の道を目指すということが、あまり珍しくなかったということもあると思います。

いずれにしても、周囲の人々の理解と応援があったことは確かです。

5年生で奨励会入りが決まったとき、担任の先生がクラスのみんなに「谷川君はこれから将棋の道に進むことになったから」と説明してくれたのを聞いて、ああ、自分はプロを目指すんだなと改めて思ったことを覚えています。

タイトルをすべて失ったことで原点を取り戻すことができた

1976年、中学生棋士として脚光を浴びてプロデビュー。その後も破竹の勢いで昇級を続け、1983年には、21歳の若さで史上最年少の名人位を獲得。1991年には、竜王、棋聖、王位、王将の四冠となった。史上初のことである。

しかしその頃から、打倒谷川を掲げる若きライバルたちが台頭してくる。中でも羽生善治さんの勢いは猛烈で、1996年2月、羽生さんは将棋の七つのタイトルすべてを獲得し七冠を達成した。それは同時に、谷川さんが無冠となったことでもある。

羽生さんに破れ無冠となったことは、非常につらい体験だったのではないでしょうか？

羽生さんに負けて悔しいというより、自分の不甲斐なさに腹が立ちました。自分の力はこんなものだったのかと。

しかし、私はタイトルを失ったことで得たものもありました。

棋士は色紙や扇子に揮毫を求められることがよくあります。その頃私は「飛翔」という字を好んで書いていました。タイトルを失ってしばらくたって、長野県の中学校の校長先生から、額装するために「飛翔」の文字を書いてもらえないだろうかというお手紙をいただきました。その学校の学園祭が「飛翔祭」だからとのこと。それにしてもタイトルを失った今の私になぜ……と思い拝読すると、「最近の子どもたちはどこかで一度つまずくと、取り返しがつかないと思い込んでしまう。谷川先生はこれまで幾多の勝負を乗り越えてこられたし、やがて冠を奪取されていくだろう。その姿こそが説得力をもって生徒に訴えるものがあると思う。だから失礼ながらあえて無冠の今だからこそ、お願いしたいのだ」というものでした。

このお手紙は、私にとっても大きな励ましとなりました。ともすれば弱気になりがちでした。しかし、私の復活を期待をもって見守ってくれている人たちがいる、その人たちに対する責任を果たさなければならない……。そう考えるようになりました。

もう一つ、タイトルを失ったことで、将棋の楽しさをもう一度思い出すことができました。もしあのときタイトルを失わなければ、私はそのタイトルを失うことを恐れながら将棋を指すことが続いていたかもしれません。そこに将棋の楽しさはありません。失ってしまったからこそ、かえって自由となり、将棋が指したくてたまらなかった頃の自分を取り戻すことができたのだと思います。

最初の質問に戻ってしまいますが、それでも負けることは悔しいですよね？

どんなに強い人でも、勝ち続けるということはないんです。確かに上位者になると負ける割合は小さくなるのですが、上位者ほど対局数も多いので、結局、1年間の負けの数はあまり変わらないんです。だいたい20局は負けます。私自身、棋士になってから700局以上負けています。

しかも、将棋は「負けました」と負けを認めることによって勝敗が決まるゲームなんです。どんなに強い人でも、自分の負けを認めることができなければ、棋士でいる資格はないと私は思います。

一度負けたら復活は難しい競技も世の中にはありますが、将棋はまたすぐに、次の機会が与えられます。それも将棋のよさだと思います。

5歳のときに買ってもらった将棋の駒は傷だらけで、噛み痕もついていたという。兄に負けた悔しさに谷川少年が駒を投げ、駒を噛んだからだ。

もちろん今の谷川さんはそんなことはしない。駒を置く手はまるで舞っているような美しさだといわれる。しかしその奥にある激しさは、将棋の駒に噛みついた5歳のあのときと変わっていないのではないだろうか。勝負にこだわるからこそ、勝負を大切にする。

「あなたが無冠の今、あえて揮毫をお願いしたい。復活するあなたの姿にこそ生徒に伝えるべきことがあるから。」

対局のときの厳しい表情とは違い、普段は非常にソフトに、どこか気恥ずかしそうに話す。

当たり前のことと思っていた「将棋を指す」ということが、実はとても幸せなことだと気づきました。

将棋が好きだからこそ、自らの負けも含め、勝負を大切にする。
本当の勝負を知っているからこそ、奥に秘めた厳しさを包み込む柔和な空気を、谷川さんはまとっているのではないだろうか。

震災をきっかけに思い出した喜びと、プロ棋士の厳しさ

兵庫県の神戸で生まれ、神戸で育った谷川さんは、プロ棋士として対局のため日本全国を飛び回るようになり、また、日本将棋連盟の会長という多忙な立場に立った今でも、神戸に住んでいる。
そんな谷川さんに、生涯忘れられない出来事がある。1995年1月17日。阪神・淡路大震災だ。

震災の当日は、神戸のご自宅にいらっしゃったそうですね。

私の自宅は海に張り出した人工島に建てられたマンション。対岸の神戸市内からは火災の煙が行く筋も上がっているのが見え、これは大変なことになったぞと思いました。
地震当日の午前中はさすがに不安や心配の中にいた私ですが、午後になるともう将棋のことが気になりだしました。実はこの時期、重要な対局が立て続けに組まれていたのです。
震災3日後の20日には大阪で順位戦が、23日には栃木県の日光で王将戦第二局があります。19日にやっと車で神戸を出発することができたのですが、わずか30キロほどしか離れていない大阪まで、11時間もかかってしまいました。
明けて20日。大阪の将棋会館で私は、今までに経験したことのない心境で盤の前に座っていました。
神戸から移動してきた私には、大阪でわりと普通の生活が営まれていることがまずショックでした。後から知ったことですが、神戸でも、活断層の位置などによって被害の様相がまったく違っています。あの地震で幸いにも私はけがもせずにすみました。でも、ほんのちょっと何かが違っていたら、命を失っても何の不思議もない状況だったことを、ひしひしと感じていました。
また、私自身、地震以来の緊張感からの反動か気分が高揚し、初めて将棋に出会った頃の、将棋を指すのがおもしろくてたまらない気持ち、とにかく生きて再び将棋を指せるんだという気持ち、いろいろな気持ちが交じり合う不思議な感覚に覆われていました。
いままで当たり前のことと思っていた「将棋を指す」ということが、実はとても幸せなことなのだと感じるようになりました。
その一方で、地震による精神的なストレス、肉体的な疲労の影響もありました。気持ちがどこかちぐはぐで、将棋に自分を投影できずにいました。王将戦のタイトルこそ、なんとか守ることができましたが、翌年度は負けが込み、勝率5割3分という、プロ棋士になって以来最低の成績に終わってしまいました。

「「負けました」と自分で負けを認めることができなければ、棋士としての資格はありません。」

「将棋を指せる喜びを感じながら、貪欲なまでに勝ちにこだわる。その二つを両立させてこそプロ棋士だと思います。」

その年度こそが、谷川さんが羽生さんに敗れ、無冠となった年なのだ。
そのことを地震のせいにするつもりは毛頭ありません。将棋を指せる喜びを感じることができなければ、棋士を続けることはできません。その一方でどんな状況でも勝負に際しては貪欲なまでに勝ちを求めていくことも必要です。この二つを両立させることができてこそ、プロ棋士なのだと考えています。

2011年、東日本大震災が起きました。阪神・淡路大震災を経験した谷川さんは、どのような思いをもたれたのでしょうか。

震災から約3年がたち、さまざまな問題がありますが、少しずつ復興も進んでいくと思います。
消防士さんのように直接命を救ったり、医師や療法士のみなさんのように心の傷をケアしたりすることは、私たちにとっては難しいことです。私は棋士ですから、やはり将棋を通して支援をしたいと考えています。将棋を楽しむことが、気持ちを切り替える、あるいは日常を取り戻すきっかけの一つになるのではないか、と思って活動を続けています。
将棋は将棋盤と駒さえあればどんなところでもできます。場合によってはボール紙で駒や盤をつくることもできます。それに、最初にも言いましたように、初対面の人とも楽しむことができます。
日本将棋連盟としても、震災直後からさまざまなチャリティー活動や、被災地を訪問しての将棋イベントなどを行ってきました。これからも被災者の皆さんを側面から応援していきたいと考えています。
将棋は、「負けました」と率直に負けを認め、その直後に戦いを振り返る「感想戦」に入る。そこで得た自分なりの分析、気づきは、次の対局につながっていく。
将棋以外の場でもそれは同じかもしれない。困難に直面したとき、まずはそれを直視し、受け入れる勇気と、そこであきらめずに、挫折さえも糧とし「次」へつなげていく信念をもつことが、人生においても大切なことだろう。無冠となった谷川さんにあえて揮毫を求めた校長先生の思いがそこにあったことを、改めて感じる。

そういえば、「飛翔」の文字を書いた中学校の校長先生とはその後……。

タイトルを失った翌年、私は七冠の一つ「竜王」の座につくことができました。校長先生には、東京で開かれたそのお祝いのパーティーに出席していただき、スピーチもいただくことができました。
スピーチを聞きながら、校長先生との約束、私の字を見てくれた中学生たちとの約束を守ることができてよかったと、心からほっとしました。